

本能寺本『芝草句内岩橋上』訳注(三)

伊藤伸江・奥田 勲

心敬には、和歌と連歌の自作をおさめた全八冊からなる集『芝草』があった。彼は、この『芝草』所収の自句、自歌にみずから注をつけ、弟子たちに適宜与えていた。『芝草句内岩橋』もそのような心敬の営為による一作品であり、現在京都の古刹本能寺に上下二冊が蔵せられている。伊藤と奥田は、この作品の重要性に鑑み、翻刻と注釈を試みることとした。

【凡例】

- 一、底本は本能寺蔵『芝草句内岩橋上』である。対校本は、太田武夫氏蔵文明十一年古写本(文明本)、同じく太田武夫氏蔵明応十年古写本(明応本)の二本である。しかし、現在両本の閲覧が困難な状況にあり、両本との対校は原本によってはなしえない。したがって、両本は横山重・野口英一校訂『心敬集 論集』(吉昌社・昭和二一)の翻刻に依ったので、不審な点はその旨を注記した。略称として文明本は「文」、明応本は「明」とする。
- 一、翻字本文は、本能寺本を厳密に翻刻し、原文の表記の誤りかと考えられる箇所には、校注者がへん書きで「マ」注した。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点を補つ

た。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が妥当と考えられる語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が()書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。翻字本文との相違箇所については、翻字を適宜参照されたい。

一、注釈本文の各句には、便宜上、校注者による通し番号を付した。

一、訳注においては、【校異】、【他出文献】、【語釈】、【現代語訳】の項目を設け、必要な場合には【考察】【補説】等の項目も設けた。

一、【他出文献】にあげた心敬の作品集の略称は以下の通りである。

心玉集(野坂氏本) ↓ 心玉集(野) 心玉集(静嘉堂文庫本) ↓ 心玉集(静)

心玉集拾遺(静嘉堂文庫本) ↓ 心玉集拾遺(静)

芝草内連歌合(天理本) ↓ 芝草内連歌合(天)

芝草内連歌合(松平文庫本) ↓ 芝草内連歌合(松)

また、芝草句内発句のうち、吾妻下向発句草におさめられた句は(吾妻下向発句草)と記した。

一、【語釈】にあげた和歌、連歌、歌論、連歌論などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名、漢字等に改めた。

【翻刻】

橋かすむ河へにあをき柳かな

景曲の躰とてたゝちにみるすかたのえん

なるをいへるなりみるほかに句のこゝろを

たつね給ふへからす

【校異】

河へに―川へに（文）、河原に（明） 柳かな―やなきかな（文）、柳哉（明） みるすかたの―見る姿の（文）、みる姿の（明） いへるなり―いへる也（文）、いへり（明） みるほかに―見る外に（文・明） 句のこゝろをたつね給ふへからす―尋ぬへからす（文）、句の心あるへからす（明）

【本文】

24、橋かすむ河辺に青き柳かな

景曲の体とて、直ちに見る姿の艶なるを言へるなり。見るほかに句の心をたつね給ふべからず。

【語釈】○橋かすむ：橋が霞んで見える。和歌では「橋辺霞」「橋霞」などの歌題での詠は多い。「ゆくひとをおももどわたる東路や霞かかれるさののふなはし」（道助法親王家五十首・橋辺霞・51・藤原家隆）。「にほの海やかすみてくるる春の日に渡るもとほしせたの長橋」為家集・橋霞・39。「山桜散りぬるのちは人も来で／ひとりの峰に霞むかけはし」（心玉集（静）・987）。『雨夜記』には、「景氣に景氣を付けたる句」として、「露白き野の春雨の跡／橋霞む山本遠く夜は明て」という句が引用されている。○河辺に青き柳：河辺に生え青く見えている柳。「見渡せば佐保の河原にくりかけて風によらるる青柳の糸」（新拾遺集・柳随風・1918・西行）。柳は川べりにしだれる葉先が多く詠まれ、橋や霞と詠まれることは少ない。「橋姫のみだす柳の花かづらまゆさへかすむ宇治の川風」（草根集・水郷柳・8846・康正元年三月廿六日詠）。○景曲の体：景色が眼前に浮かぶかのようにありのままに詠む風体。第43句「雨青し五月の雲のむら柏」の自注に「なが雨のやや晴のぼるころの風情也。雲のむらがれるといへるばかり也。これも景曲の躰とて今見るとくの風躰にゆづりはべるばかり也」とある。また、付合「太山の庵にころもうつ音／杉の葉にかゝれる月のかすかにて」についても「此句さらにふしも侍らず。たゞあかつき月はかすかに杉の葉分にのこりて、

そことなき砧のこゑのみ、ねぬいほりをあらはし侍る。景曲ばかり也。」と述べており、心敬が、眼前の光景をそのままに詠んだかのような句を「景曲の体」としていたことがわかる。○直ちに…じかに。そのままに。○艶なり…上品に美しいこと。

【他出文献】 芝草句内発句 493

【補説】 岡見正雄氏は、心敬の青の色彩感覚があふれた句としてこの句をあげ、「直に見る姿の艶なるものを景曲の体」といふ詞に於て現はしている」と述べる。(「心敬覚書―青と景曲と見ぬ俤―」)

【現代語訳】

橋が霞んでみえる河辺には、青々とした柳があることよ。

景曲の体といって、そのまま見る様子が上品で美しいのを、言うのである。見えていること以外に句意を求めてはいけないのである。

【翻刻】

花おつるゆふへは秋の山ちかな

花の落はてゝ人も影たえたる山の引かへ

心すこく侍るはさなから秋ふかき比かと

こゝろほそきをいへり

【校異】

おつる―落る(明) ゆふへ―夕(文・明) 山ち―山路(文・明) 花の落はてゝ―花落はてゝ(文)、花の落果

て(明) 人も影たえたる―人も影せぬ(文)、人の影も絶たる(明) 山の―山路の(明) 引かへ―ひきかへ

(文)、ひきかへて(明) 侍るは―侍は(文)、侍(明) 比か―比(文) こゝろほそきをいへり―こゝろほそき

をいふ也(文)、心細きをいへり、比等の句、心にて見給へくや(明)

【本文】

25、花落つる夕べは秋の山路かな

花の落ちはてて、人も影たえたる山の、ひきかへ心すこく侍るは、さながら秋深き頃かと心細きを言へり。

【語釈】○花落つる夕べ…桜の花が散る夕暮れ時。落花は暮春を表し、暮春の夕暮れ時の情景となる。「暮春の心ナラバ、…根にかへる花落花(連珠合璧集)」。○秋の山路…秋の山路の様子。「しめぢがはらにかへるくさかり／竹がりの秋の山路にけふくれて」(菟玖波集・434・救済法師)。○人も影たえたる…人影も絶えた。桜が散った後に訪れる人もいなくなる寂しさが詠まれる。この句は心敬によれば山里の情景であり、人影もない寂しさも際立つ。同様の心情を詠んだ句として、第18句「花落ちて小笹露けき山路かな」があり、「花の残るまでは山路に人のたえ侍らねば、さしも露のしげき笹葉にも消え失せ侍りしに、花おちはてぬれば、人の影もたえ、もとのごとく露のみ繁しとなり。」との自注が付されている。落花の後の寂しさは、和歌では歌題「花落客稀」に表現されている。「ふるさととは花こそいとどしのばるれちりぬるのちはとふ人もなし」(千載集・春下・花落客稀といへる心をよめる・102・藤原基俊)。「花散ればとふ人まれになりはていとひし風の音のみぞする」(新古今集・春下・花落客稀といふ事を・125・刑部卿範兼)。ここは、秋の静寂、孤独感へとつないだ発想が新しいが、発句一句の中に納められると素材の多さが目につく。心敬の付句では、時の流れを感じさせつつも寂しさを共通項に春秋をつないだ「人も散る昨日の花の山里に／木の葉音する秋ぞ悲しき」(芝草句内岩橋、竹林抄552)がある。○引きかへ…すっかり様変わりして。○心すこく…非常に寂しい。気味悪いほどの寂しさで、心細さを感じるような気持ち。「古畑のそのの立木にゐる鳩の友呼ぶ声のすごき夕暮」(新古今集・雑中・1676・西行法師)。「すごきかなやくすみがまにたつ煙心ぼそさを空に見せつつ」(拾玉集・賦百字百首・冬・1266)。「思ひやれとふ人もなき山里の懸樋の水の心細さを」(後拾遺集・雑三・1040・上東門院中

将)。

【他出文献】心玉集(野) 108、心玉集拾遺(静) 1666、芝草句内発句(吾妻下向発句草) 500

【補説】心敬僧都十体和歌に「静対花」と題された和歌「桐のはの砌にもろき秋はあれどゆふへの苔に花おつるとき」(心敬僧都十体和歌・強力体・302)がある。上の句は「秋露梧桐葉落時」(長恨歌)により、桐の葉が砌に散った光景を、苔に散り敷いた花に比した。「春の花秋の木の葉の落つるにもはかなき世をぞ思ひ知りける」(唯心房集・縁覚・18)のように、飛花落葉に仏教思想を感じる歌が既にあり、同様の心情が底流していよう。同時に、春秋それぞれの季節に見られるしみいるような寂しさが心敬に意識され、対比されて詠まれていることも気づかれる。

【現代語訳】

花が散る夕暮れは、秋の山路のように寂しく心細い気持ちができることだ。

花が落ち尽くして、人影も絶えた山が、一転して、恐ろしいほどの寂しさを示しますのは、まるで秋が深まった頃かと思われる、その心細さを詠んでいるのです。

【翻刻】

人のもる花はこゝろのかさしかな

あるしの花なとは一枝のそのみもむなしく

侍れはたゝ心のうちにかさして帰るはかり也

【校異】

もる―守(明) こゝろ―心(明) のそみ―望(文・明) たゝ心のうちに―たゝ心うすく(文)、只心のうちに

(明) かさして帰るはかり也―かさしてかへる計也(文)、折かさし帰るはかり也と(明)

【本文】

26、人のもる花は心のかざしかな

あるじの花などは、一枝ののぞみもむなしく侍れば、ただ心のうちにかざして帰るばかりなり。

【語釈】○人のもる…その人が守っている。「守人のとがめやせんと花をりて／わらびを手ににぎりてぞ持」(長祿三年千句第八百韻・91/92・芳阿/惠秀)。○心のかざし…心の中で、髪にかざること。かざしとは、髪や冠に草木の花や葉を飾ること。「深山路はさながら花の陰なれどあかぬ心にかざしてぞゆく」(草庵集・花挿頭・169)。「花はただ心の老いのかざしかな」(竹林抄・1613・心敬)。「花ぞなきかざして春や帰るらむ」(竹林抄・暮春の心を・1662・心敬)。○かざして帰る…花見に行き、その美しさを分かち持ち、名残を惜しむという気持ちから、挿頭にして帰ることとは風雅な振る舞いであった。「あふ人のかざしてかへる花を見て散らずと急ぐ春の山道」(花十首寄書・114・散位基任)。

【他出文献】心玉集(野) 39 (「かざしかな」は「ふたぎかな」となっている)・芝草句内発句80・芝草内連歌合(天) 2563・芝草内連歌合(松) 28・苔薙 2129

【現代語訳】

人が見守り気を配っている花は、どんなに美しくとも折り取るわけにもいかない。心の内で髪飾りとするのです。

主人がいる桜の木の花などは、一枝折り取りたいという望みもむなしくかなえられないことですので、ただ心の中で花を挿頭にして帰ることです。

【翻刻】

うすくこぎ花は心の二木かな

一もとの花にみる人のなさけの浅深さまく
かはり侍るへきことを

【校異】

うすくこぎ―薄くこぎ(文)、うすくこく(明) 心―こゝろ(文) かな―哉(明)

花にみる―花を見る(文) なさけの―なさけ(文)、情の(明) 浅深―ふかくあさきやうに(文) 浅深の

(明) さま―かはり侍る―かはり侍(文)、さま―にかはり侍(明) こと―事(文・明)

【本文】

27、薄く濃き花は心の二木かな

一もとの花に見る人のなさけの浅深さまざま変はり侍るべきことを

【語釈】○薄く濃き…薄かったり濃かったりして。「うすくこぎ」は新古今集の宮内卿の歌が有名であり、和歌では草や紅葉の濃淡を詠むことが多い。連歌においてもやや素材は広がるもののほぼ同様で、花に用いるのは珍しい。「うすくこぎ野辺の緑の若草に跡までみゆる雪のむら消」(新古今集・春上・76・宮内卿)。「ゆふべの色はわかれざりけり／うすくこぎ花をいづれと誰おらん」(壁草・春・151/152)。○二木…二本の木。根元から二本にわかれた武隈の松が名高く、和歌では松の木を詠むことが多い。「武隈の松は二木をみやこ人いかがとはほみぎとこたへむ」(後拾遺集・雑四・104・橘季通)。

【他出文献】心玉集(静) 676、芝草句内発句 82

【現代語訳】

薄かったり、濃かったりする花の色を見ると、相手によって思う気持ちも、深かったり浅かったり、二木のようにだ。

一本の木の花を見ても、愛でる人の思いが、浅いものであったり、深いものであったりと、さまざま変換すること

を（詠みました句）。

【翻刻】

世には人花には梅のほひかな

この世にいかばかりの有情侍れとも中にも

なさけふかきは人第一也又万木に花も句も

侍れとも梅にこゆるはあるへからすと對し

侍りいさゝかあるしなとを賀し侍る会なれる

【校異】

かな―哉（明） この世に―此世に（文）、此世には（明） いかばかりの有情侍れとも―いか計の有情侍れとも（文・

明） は人―人の（文）、人（明） 万木に―万木の（明） 侍れとも―なし（文） あるへからすと―有へからす

と（文）、なしと（明） あるしなとを―主なとを（文）、あるしを（明） 賀し侍る会なれる―かみし侍會なれば

（文）、賀し侍るはかり會なれば也（明）

【本文】

28、世には人花には梅の句ひかな

この世にいかばかりの有情侍れども、中にもなさけ深きは人、第一なり。また、万木に花も句ひも侍れども、梅に越ゆるはあるべからずと對し侍り。いささかあるじなど賀し侍る会なれる。

【語釈】○世には人…この世の中においては、最も情趣深いのは人であるということ。さらにこの場合には、この世の中で、誰よりもめでたくすばらしいのは、亭主であるこの家の主人だと祝した意味を持つ。○花には梅のほひ…

花々の中では、梅の香りこそが最もすばらしい。心敬は梅の香りの艶なる風情を次のように歌に詠んでいる。「ふかき夜の梅の匂ひに夢さめてこす巻ぎあへぬ軒の春風」(心敬集・軒梅・301)。○有情：感情を持つものの意。生きとし生けるもの。○あるじなどを賀し侍る会：主人などを祝います会。連歌の張行をした人物に祝い事があり、それを祝し、発句に祝意を込めている。

【他出文献】 心玉集(野) 128・心玉集拾遺(静) 1686・芝草句内発句(吾妻下向発句草) 602

【現代語訳】

世の中では人が、花の中では梅の香りこそが、最も情趣あふれるものであるよ。(この連歌を行われたあなたは、花の中でもすばらしい梅の花のように、誰にもましてご盛運であることよ。)

この世の中に、人や動物などどれほど感情のあるものがおりましたが、その中でも情趣の深いことは人が一番なのである。また、すべての木々には、花も匂いもございますけれども、梅にまさるものはあるはずがないということ、人と梅とを対比しました。亭主のことなどを少しお祝いしました会なので(このように詠みました)。

【翻刻】

へたてゝもわれそむら山あさかすみ

霞の山をへたてにて侍れともをのれかす

かたむら山をのこし侍れはへたてたる山を

かくしえずと也

【校異】

われそむら山―我そむら山(文)、我や村山(明) あさかすみ―朝霞(明) 霞の山をへたてにて―霞の山をは隔侍れとも(文)、霞山をは隔侍とも(明) をのれかすかた―おのれか姿(文)、をのか姿(明) むら山をのこし侍

れは―村山を残し侍れば(文)、むら山と見え侍れば(明) へたてたる山をかくしえずと也―山をはかくしえずと也(明)

【本文】

29、隔てもわれそむら山朝霞

霞の、山を隔てにて侍れども、をのが姿群山を残し侍れば、隔てたる山を隠しえずとなり。

【語釈】○隔ても…朝霞が隔てているとしても。霞がかかるとその向こうの山が見えなくなることから、霞が山々を隔てている情景が歌には詠まれている。「朝かすみいろこきかたをしるべにてへだてて山も見えぬ春かな」(心敬僧都十体和歌・有心体・山霞・2)。○むら山：群山。多くのより集まっている山々。万葉集の「大和には群山あれど」の歌(巻一・2・舒明天皇)以来、歌語としての位置を占めている。「朝ぼらけしくや霞に残るなり大和島ねの春のむら山」(草根集・山霞・5442・宝徳元年二月四日条)。「むら山もひとへになびく霞かな」(大発句帳・668・紹巴)。

○朝霞：朝に立つ霞。

【他出文献】芝草句内発句(吾妻下向発句草) 600

【現代語訳】

朝霞が群山を隔ててはいても、その霞の姿こそが、隠しおおせぬ群山の姿なのだ。朝霞よ。

霞が、山を隔てはしておりますけれども、自らの姿を多くの山に残していますので、隔てている山を完全に隠すことはできないということである。

【翻刻】

さほひめのわかれのくしやあさ月夜

大極殿にてなけ侍しより別のくしといひなら

はし侍り朝の月はくしに似たれはさほ姫の

わかれのくしか末の春の月はいへり

【校異】

さほひめのーさほ姫の(文)、佐保姫の(明) わかれのくしー別のくし(文)、別の櫛(明) あさ月夜ー朝月夜

(明) 大極殿にてー彼大極殿にて(明) 別のくしとー別の櫛と(文) 朝の月はくしにー朝月はくしに(文)、朝

の月は櫛に(明) さほ姫のわかれのくしか末の春の月はいへりー棹姫の別のくしか末の春の月はいへり(文)、

すゑの春の月はさほ姫のわかれのくしかと也(明)

【本文】

30、佐保姫の別れの櫛や朝月夜

大極殿にて投げ侍りしより、別れの櫛と言ひならはし侍り。朝の月は櫛に似たれば、佐保姫の別れの櫛か、末の春の月はいへり。

【語釈】○佐保姫…春の女神。「別れ」とあるので、春の別れすなわち晩春の気分がこめられているか。○別れの櫛…

齋宮伊勢下向の際の御櫛の儀。帝が齋宮に黄楊の櫛をさす。『源氏物語』賢木巻には、六条御息所につきそわれた娘齋宮が、伊勢出立に際して帝との別れの櫛の儀にのぞむ様が、「(齋宮)いとゆゆしきまでに見えたまふを、帝御心動きて、別れの櫛奉りたまふほど、いとあはれにて、しほたれさせたまひぬ」と描かれている。後の漂標の巻には、朱雀院が儀式の際の齋宮の美しさを忘れかねていた様子が「かの下りたまひし大極殿のいつかしかりし儀式に、ゆゆしきまでに見えたまひし御容貌を、忘れがたう思しおきければ」とあった。このエピソードを「別れの櫛」として和歌に詠み、連歌においても踏襲する。「櫛トアラバ、…別野宮(連珠合璧集)。「賢木…別のくし」(光源氏一部連歌寄

合)。「かへりみぬわかれの櫛のさしながらならひぞつらきたゆる黒髪」(草根集・寄櫛恋・1912・永享五年三月三日詠)。「ささぬ戸ほそに残る月影／野宮は別のくしも昔にて」(連歌愚句・442／443)。「野の宮のわかれの小櫛かたみかや／伊勢路にかよふ程の遠さよ」(看聞日記紙背賦山何連歌(応永三二年閏六月二五日)・81／82・前宰相／長資朝臣)。○朝月夜：明け方に空に残っている月。夜中に昇り、明け方に空に見える月は、新月になる前の下弦の月である。

【他出文献】芝草句内発句(吾妻下向発句草) 503

【考察】心敬の自注においては、「別れの櫛」は「大極殿にて投げ侍りし」と記される。しかし、源氏物語本文では、「別れの櫛奉りたまふ」と諸本異同はなく(源氏物語大成による)、管見の限りにおいては、櫛を投げるとする古注釈書、梗概書の説明は見当たらない。源氏物語の説明部分に各種異文の散見される宗砌の『古今連談集』も「帝かなしませ給て別の御くしさ、せ給」としており、「別れの櫛」に関して、正徹の『源氏一滴集』は、「わかれのくし櫛 齋宮群行日主上齋宮ノ御ヒタヒニクシヲサ、セ給テ京ノカタニヲモムキ給ナト被仰云云其後齋王カヘリミ給ハヌ事也此事秘説也」と注する。櫛を投げる逸話にはイザナギイザナミの神話があり、何らかの形で混同が起こったものか。

【現代語訳】

佐保姫が別れを告げて去っていく、その別れの櫛なのだろうか。明け方の空に残っている月は。

あの源氏物語で、大極殿において櫛を投げましたその場面から、別れの櫛と言いならわしております。朝に出ている(月の終わり頃の)月は、櫛の形に似ているので、齋宮ならぬ佐保姫の別れの櫛なのだろうか、春の終わり頃の月と言ったのである。

【翻刻】

郭公とはすかたりののはつ音かな

はつこゑを聞えたる時はすゝろにあへる人に
かたりいてたく侍れば也

【校異】

郭公―ほと、きす(文)、時鳥(明) とはすかたり―とはす語(明) はつ音―初音(文・明) はつこゑ―初音
(文・明) かたりいてたく―語たく(文)、語出たくのみ(明)

【本文】

31、郭公とはすがたりの初音かな

初声を聞きえたる時は、すずるに会へる人に語り出でたく侍ればなり。

【語釈】○とはすがたり…人に尋ねられないのに、自分から話した事。『よ所にふけみし世の夢は跡もなしとはすがたりのさ夜の松かぜ』(心敬集・懐旧・270)。○初音…鳥・虫などの、鳴きだす時期の最初の鳴き声。多く鶯に言うが、ここはほととぎすが初めて鳴く声。人々にとつて初音は心待ちにするものだった。『けふもまたたづねくらしつほととぎすいかにきくべきはつねなるらん』(金葉集三奏本・夏・ほととぎすをたづぬといへることをよめる・III・藤原節信)。ほととぎすは初夏に山から人里に降りてきて鳴く。

【他出文献】宗硯日発句(大東急記念文庫本) 430・心玉集(静) 733・心玉集(野) 152・芝草句内発句 154・芝草内連歌合(天) 2572・芝草内連歌合(松) 37

【現代語訳】

尋ねられもしないのにその声を聞いたことを語る、そんなほととぎすの初音であることよ。
ほととぎすの初音を聞くことができた時には、むやみに、会った人にそれを語り出たくごぎいますので(このように詠んだのです)。

【翻刻】

ほとゝきすきかぬ初音や朝くもり

はつ音をまつ比のなにとなくうちくもりたる待

空なとは今日はざりともと思をかけぬれば先

きくことくこのもしく侍ると也

【校異】

ほとゝきす―郭公(文・明) 初音や朝くもり―はつねやあさくもり(文)、初音や朝霞霞(明) はつ音をまつ比―

はつ音を待比(文)、初音を待比(明) なにとなく―何となく(文・明) うちくもりたる―打曇侍る(文)、打く

もりたる(明)、今日はざりともと―けふはざり共と(文)、今日はざりともに(明) かけぬれば―かけ侍れば

(明) 先きくことく―まつきく如く(文)、先きくことく(明) このもしく侍ると也―たのもしく侍るとなり

(文)、たのもしく侍ると也(明)

【本文】

32、ほととぎす聞かぬ初音や朝くもり

初音を待つ比の何となくうちくもりたる空などは、今日はざりともと思ひをかけぬれば、まつ聞くごとく好も

しく侍るとなり。

【語釈】

○聞かぬ初音…まだ耳にしていないほととぎすの初鳴き。○朝くもり…明け方に、空が曇ること。多く春も

しくは秋の朝を詠む。春では桜の花が咲く様子と重ねることが多く、ほととぎすと合わせた詠み方は珍しい。「むら

の秋のあさぐもり霧にしをるる槇の下露」(新古今集・秋下・492・後鳥羽院)。「うちしめるまがぎの山のあさぐもり露よりよはし萩の上かぜ」(心敬僧都十体和歌・麗体・朝萩・161)。「ほととぎすなげやうづきのあさぐもり」(宗硯日発句(大東急記念文庫本)・417)。○今日はさりとも…そうであっても今日は。今まで聞くことができなかつたほととぎすの初音も、今日は聞くことができるだろうとの期待をこめた思い。

【他出文献】 心玉集(静) 785・心玉集(野) 177・芝草句内発句 155

【現代語訳】

ほととぎすの初音は、まだ聞いてはいないけれども、心待ちにしている。この朝曇りの空には。

ほととぎすの初音を待つ頃の、なんとなく曇っている空などには、今までは聞けなかつたといつても、今日はきつと聞くことができるだろうと願いをかけていると、まるで聞いた時のように好ましく思われますということである。

【翻刻】

一こゑに見ぬ山ふかしほととぎす

閑日に一こゑなと音信待るはさなから山家

などの心うかひ侍れは也武蔵野にての発

句なれる

【校異】

一こゑに―一聲に(明) ほととぎす―郭公(明) 一こゑなと音信待る―ひと聲なとをとつれ侍る(文)、一聲なと音信待る(明) 也―なり(文) なれる―ナシ(文)、なれば、かやうに申侍り(明)

【本文】

33、一声に見ぬ山深しほととぎす

閑日に一声などおとづれ侍るは、さながら山家などの心浮かび侍ればなり。武蔵野にての発句なれる。

【語釈】○見ぬ山深し…周囲に山は見えないが、深い山の中にいるかのように思われることだ。○閑日…何も用のない、ゆつたりした日。定家と慈円の文集百首歌題に「閑日一思旧 旧遊如目前」が見られる。○武蔵野…武蔵国の歌

枕。武蔵国に広がる野をいう。武蔵野は、見渡す限りの野原として詠まれる。「行く末は空もひとつの武蔵野に草の原より出づる月影」(新古今集・秋上・藤原良経・422)。「むさしのはつきのいるべきみねもなしをばながすゑにかかるとしらくも」(続古今集・秋上・大納言通方・425)。

【他出文献】竹林抄 1674・新撰菟玖波集 3706・心玉集拾遺(静) 1715・芝草句内発句(吾妻下向発句草) 505・大発句帳 2797

(初句「ひとこゑは」)

【補説】竹林抄の古注釈では、この句について、次のように、「見ぬ山」に込められた意味を深山にいるかのように心で感じとることと解説している。「思もかけす一こゑきくきはには、只深山の心地せる義也」(竹林抄之注)。「武蔵ニテノ発句也、山ノある処ニテハ、無曲、心ノ深々トシタル也」(竹聞)。

【現代語訳】

ただ一声鳴いたその声に、周囲に山など見えないのだが、まるで深山の中にいるかのような心地がしたことだ、ほととぎすよ。

ゆつたり暇な日に、ほととぎすが一声鳴いたりなどいたしますのは、まるでそのまま山家にいるかのような気持ちになります。武蔵野で詠んだ発句なので、このように詠みました。

【翻刻】

夏ふかみ風きくほとわか葉かな

春のほとんやはらかなる葉にはいかはかりの

風もをときこえず侍るに漸夏たけ葉も

のひ侍るかかすかに風の音し侍るはと也

【校異】

ふかみ―深み(明) きく―聞(明) わか葉かな―若葉かな(文)、若葉哉(明) 春のほと―春のほと

(文) 葉には―葉に(明) はかり―計(文・明) 風もをと―風も音(文・明) きこえず侍る―聞えず侍

(文) のひ侍るか―のひ侍る(文) 侍るは―侍れは(文)

【本文】

34、夏ふかみ風聞くほどの若葉かな

春のほどのやはらかなる葉には、いかばかりの風も音聞こえず侍るに、漸く夏たけ、葉も伸び侍るか、かすかに風の音し侍るはとなり。

【語釈】 ○夏ふかみ：夏が深まって。「木葉がくれをたのむおく山／夏ふかみあるかなきかの夜半の月」(吾妻辺云捨・夏・157／158)。

【他出文献】 心玉集(静) 784、芝草句内発句 161

【現代語訳】

夏が深まって、風の音が聞こえるくらいの若葉となったことよ。

春のうちの柔らかな葉では、（葉が薄く柔らかなので）どんな風に吹かれても葉音が聞こえませんが、だんだん夏が盛りになり、葉も伸びたのでしょうか、かすかに風の音がしますよということである。

【翻刻】

夏草をむすひてかへる春もかな

草を結ふといへる事は野などの道のしるし

なれば草を結ひても春の跡に立かへれかし
となり

【校異】

むすひて―結ひて（明） かへる―帰る（明） 結ふといへる事―結ふと云事（文）、むすひてといへる事（明） な
れは―也（明） 草を結ひても―あはれ草をむすひても（文）、万葉などに見え侍りされはあはれ夏草結ひてしるへ
にも（明） 春の跡に―春のあとに（文）、春の跡へ（明） 立かへれかし―帰れかしと也（文）、立かへれかしと也
（明）

【本文】

35、夏草をむすびてかへる春もかな

草を結ぶといへる事は、野などの道のしるしなれば、草を結びても春の跡に立かへれかしとなり。

【語釈】○夏草…夏に茂る草。丈高く、旺盛な生命力を見せる。「夏草は茂りにけりなたまぼこの道行き人も結ぶばかりに」（新古今集・夏・188・藤原元真）。「むすぶべきみちゆき人もまよふまでさながらしげるのべの夏くさ」（政範集・径夏草・343）。「むすびて…草を結び道しるべとする。「おろかにわれぞまよひはてぬる／むすびおく道の夏草身

もわかで」(下草(龍谷大学本)・夏・199/200)。○かへる春もがな…「かへる」は「帰る」と「還る」を掛けた。

【他出文献】 芝草句内発句 169

【現代語訳】

夏草を結んで道しるべとして帰るように、春が還つて来てくれたらいいのに。

草を結ぶということは、野などの道での道しるべであるので、草を結んでも戻る、すなわち、春の跡に立ち戻れよということである。

【翻刻】

夏ふかみ風もなこやかした葉哉

夏の下葉は若葉なれば風もなこやかなると

いへりなこやか下とつねにいひならはし侍れば

こと葉にひかれて下葉といへり

あつふすまなこやかしたにふせれとも

君としねゝははたしさむしも

なこやかにやはらかなる下にねたれ共ひとりはさむしと也

【校異】

した葉哉―下葉かな(文)、下葉哉(明) いへり―云(文) なこやか下―なこやかした(文) つねに―ふるく

(明) こと葉に―ことはに(文) 下葉といへり―下葉といへり万葉に(文)、下葉といへり万葉の哥(明) なこ

やかした―なこやか下(文・明) はたしさむしも―はたへさむしも(文)、はたし寒しも(明) やはらかなる下

に―やはらかなるといへり(文)、やはらかなる下には(明) ねたれ共ひとりはさむしと也―ナシ(文)、ねたれと

獨は寒しと也 (明)

【本文】

36、夏ふかみ風もなごやがした葉かな

夏の下葉は、若葉なれば風もなごやかなるといへり。なごやが下と常にいひならはし侍れば、言葉にひかれて下葉といへり。

あつぶすまなごやがしたにふせれども君としねねばだしさむしも
なごやかにやはらかなる下にねたれども、ひとりはさむしとなり。

【語釈】○あつぶすま：厚い寝具。万葉集巻第四、524番歌による表現。西本願寺本万葉集の現在の読み下しは、「蒸し衾なごやが下に伏せれども妹とし寝ねば肌し寒しも」であるが、六百番歌合にはこの歌を本歌として顕昭が「厚衾和やが下は思やる心のみこそ夜を重ぬらめ」と詠んでいる。心敬も「あつぶすま」と読む。『万葉詞』、宗祇の『万葉集抄』、いずれも万葉集524番歌は「あつぶすま」と記されている。○なごや：形容詞「なごし」の語幹に状態を表す接尾語「や」がついたもの。穏やか、温和であるさま。下葉は下方の枝にある葉。「われぞしくたのめし人のことの葉はなごやがしたの夜の衾を」(草根集・詞和不逢恋・4399)。「とはばただなごやが下のさよあらし／とこふりぬともおもふかたしき」(秋津洲千句第八百韻・23/24)。

【他出文献】芝草句内発句 (吾妻下向発句草) 510

【現代語訳】

夏がふかまり風もなごやかに吹く、木々の下葉の様子よ。

夏の木々の下葉は、若葉なので、風も穏やかであると言っている。「なごやが下」といつも言いならわしている。すので、その言葉にひかれ、下葉と言っている。

あつぶすまなごやがしたにふせれども君とし寝ねばはだしさむしも
なごやかでやわらかな下に寝ているけれども、一人は寒いということである。

【翻刻】

朝すゝみ水の衣かる木かけかな

水衣なと詩にも侍れは也氷のこと也木の下

水のほとりにあしたたゝすみぬれはさなから

水のきぬをきたるはかりなりと

【校異】

文明本にはこの句及び注はない。

朝すゝみ―朝涼み(明) 衣かる―きぬかる(明) 木かけかな―木陰哉(明) 水衣―水のきぬ(明) 氷のこと也

―氷の事也(明) 木の下水の―されは木の下水などの(明) たゝすみぬれは―たゝすめは(明) 水のきぬを―

氷のきぬを(明) はかりなり―計なる(明)

【本文】

37、朝すずみ水の衣かる木かけかな

水衣など詩にも侍ればなり。氷のことなり。木の下水のほとりに、朝たたずみぬれば、さながら水のきぬをきたるばかりなりと。

【語釈】

○朝すずみ…夏の朝の涼しい頃、風に吹かれ涼むこと。「夏ふかきくさのまがきのあさすずみみどりのいろいろきよくもあるかな」(伏見院御集・1257)。「あさすずみただ山風のかかげかな」(自然齋発句・852)。

○水の衣…氷の異

名。「水の衣 氷の事也。水のきぬともいふ」（匠材集）。但し、「水衣」は漢詩（杜甫「重題鄭氏東亭詩」など）では海藻の一種アオサとして出現する。○かる…上代東国語で、「着る」または「ける」のなまり。「笹が葉のさやぐ霜夜に七重着る衣に増せる児ろが肌はも」（万葉集・卷二十・防人歌・443）。

【他出文献】 心玉集（静）767・心玉集（野）159・芝草句内発句196・芝草内連歌合（天）2584・芝草内連歌合（松）49

【現代語訳】

朝、涼しい頃に風に吹かれて涼んでいる。木陰にいと、まるで水の衣をまとっているかのように涼しく感じられるのだ。

「水衣」などと、漢詩にもごぎいますからこのように詠みました。氷のことである。木の下を流れる水のほとりに、朝、佇んでいると、まるで冷たい水の衣を着ているかのようにであると（詠みました）。

【翻刻】

はちす葉、水よりこすの句かな

はちすは夏のたきもの、名なれば池上より

みすのうちなとえんにふかくかほるといへり

【校異】

はちす葉、蓮葉は（文）、荷葉は（明） 句かな―にほひ哉（文）、句哉（明） はちすは―蓮は（文）、荷葉は

（明） たきもの―薫（文・明） 池上より―池の上より（文）、池上なとより（明） みすのうちなと―みすのうち

は（明） かほるといへり―かほる也（明）

【本文】

38、^{商葉}はちす葉は水よりこすの匂ひかな

はちすは、夏の薫物の名なれば、池の上よりみすのうちなど艶に深く薫るといへり。

【語釈】○はちす葉…ハスの葉。また、「荷葉」の場合、ハスの葉の意味とあわせ、夏に用いる代表的な薫物の名でもある。

「ただ荷葉を一種合はせたまへり。さま変り、しめやかなる香して、あはれになつかし。」(源氏物語・梅枝)。

○こす…すだれ。「ねやのうちにはこすのほひにうちくもり／人やとひくる袖のおもかげ」(河越千句第三百韻・91／

92・心敬／箴弘)。○艶…優美で魅力的なようす。

【他出文献】心玉集(静) 769・心玉集(野) 161(初句「はすのはは」)・芝草句内発句 234

【現代語訳】

はちす葉とは、水の上よりも、薫物として御簾の内にたぎしめた匂いなのだなあ。

はちすというのは、夏の薫物の名であるので、池の上よりも御簾のうちなどに優美に心深く薫るものだというのである。

【翻刻】

日にかさせ青葉さくらの三重かさね

さくらの三重かさねとはあふきのこと也夏の

日におりかさせといへるはかり也源氏にある事也

【校異】

青葉さくら―青葉櫻(明) さくらの―櫻の(文・明) とは―と(明) あふきのこと也―扇の事也(文)、あふ

きの事也(明) おりかさせ―折かさせ(文・明) はかり―計(文・明)

【本文】

39、日にかざせ青葉桜の三重がさね

さくらの三重がさねとはあふぎのことなり。夏の日に折りかざせといへるばかりなり。源氏にあることなり。

【語釈】○青葉桜：春の終わり頃、木々に青葉が出てからも咲いている桜。「花は春はるははなとてよし野山あをばざくらに別をしみて」(拾玉集・2556)。○三重がさね：檜扇で、板数が多く重なったものをさす。板七、八枚が一重で、それが三つ重なったものという。「三重トアラバ、扇(連珠合璧集)。ここでは「桜の三重がさね」で、『源氏物語』花宴の巻で、光源氏が朧月夜の君との一夜のあと、とりかえた扇をさす。正徹の『源氏一滴集』にはとりあげられていないが、正徹弟子正般の筆と伝えられる『源概抄』には記載が存する。「内侍のかみの扇はさくらの三重がさねにかすめる空の月を水にうつしたり。この心を付べし。」(『源概抄』)。和歌では正広や孝範ら正徹周辺の歌人に集中的に詠まれており、連歌では兼載も詠むことから、心敬あたりから連歌師に広まっていった源氏詞といえよう。「とりかへしさても桜の三重がさねいとどこころやうつりはてけん」(為尹千首・寄扇恋・77)。「花もなき園に桜の三重がさねいつしか風をならす比かな」(松下集・閑中扇風・2763)。「尋ねても又や桜の三重がさね霞める月の行へしらねば」(孝範集・寄扇恋・11)。「霜蘆やかれ野の衣の三重重ね」(園塵第四・2339)。○折りかざせ：「折りかざす」は、折って日にかざす。「よよのはる秋のみや人をりかざせくもぬのにはのふぢのさかりを」(秋篠月清集・治承題百首・祝・477)。「桜の三重がさね」の扇の「桜」を、枝と見て「折りかざせ」と言ったか。

【他出文献】芝草句内発句(吾妻下向発句草) 564

【現代語訳】

日の光にかざせよ、青葉の季節となって、その青葉に残る桜ではないが、桜の三重かさねの扇を。

桜の三重重ねとは、扇のことである。夏の日におりかざせといっているだけのことである。源氏物語にあることである。

【補説】このあたりから、夏の桜や雪を思わせる橘など、景物を本来の季節とずらした、機知ある表現の句を並べている。

【翻刻】

清水せく岩もとさくら風もかな

岩もと清水のなかるゝあたりの桜なればさしも

花にいとひし風をも此比は待ぬると也

定家卿の心のほとを風にみえぬるなどの面影なるへく哉

【校異】

岩もとさくら―岩もと櫻(文)、岩本櫻(明) 風もかな―かせもなし(文) 清水の―清水(明) 待ぬると也―

待と也(明) こゝろの程を―心のほとを(明) などの―の(明) 面影なるへく哉―おも影なるへくや(文)、

面影か(明)

【本文】

40、清水せく岩本桜風もがな

岩本清水の流るるあたりの桜なれば、さしも花にいとひし風をも、このごろは侍りぬるとなり。定家卿の心の

ほとを風に見えぬるなどの面影なるべくか。

【語釈】○岩本桜…岩のほとから生えている桜。「芳野川岩もとさくら咲きにけり峰よりつづく花の白浪」(続後拾

遺集・春上・72・九条道家。「たが世にか深山にたねを植たてる岩もと桜さきてちるらん」（心敬僧都十体和歌・長高体・寄花雑・193）。○岩本清水：岩のほとりの清水。○侍りぬる：つい待ってしまう。○心のほどを風に見えぬる：藤原定家の和歌「夏ふかき桜がしたに水せきて心のほどを風に見えぬる」（拾遺愚草・二見浦百首・126）による表現。夏になると、桜の木の下に水をせき入れて、その涼風で涼む。春には花を散らすといって嫌っていたのに、心変わりした、その変わりやすい心を風にみられてしまったということ。

【他出文献】心玉集（静）762・心玉集（野）200（第三句「かせもなし」）・芝草句内発句 231・芝草内連歌合（天）2585・芝草内連歌合（松）50

【現代語訳】

清水をせきとめる岩のほとりの桜には、涼しさを呼ぶ風があつてほしい。

岩のほとりに清水が流れるあたりの桜であるから、春にあれほど花に吹くことを嫌った風でも、この頃にはつい待ってしまうということです。定家卿の「心のほどを風にみえぬる」などの歌の面影が感じられるのではないか。

【翻刻】

をそさくら春はみすまく軒は哉

春はつるに見さりしといへる秀句也かやうに

なまりて侍るを一の躰なれば也古哥ともに

玉たれのみすはいかてか山しろのとはぬつらさは

などのたくひ数をしらす

【校異】

をそさくら―遅櫻(明) 軒は哉―軒端かな(文) つゐに―終に(明) といへる秀句也―軒の花いまみすをまくといへる秀句也(文) 侍るを―いへる(明) 古哥ともに―ナシ(文)、古哥ともに(明) 玉たれの―玉たれの(文)、玉垂の(明) などのたくひ―のたくひ(文) 数をしらす―数を不知(文)、数を知す此句なまれるを粉骨(明)

【本文】

41、遅櫻春はみすまく軒ばかな

春はつゐに見ざりしといへる秀句なり。かやうになまりて侍るを―の躰なればなり。古歌どもにも、玉だれのみすはいかでか山しろのとはぬつらさはなどのたくひ数をしらす。

【語釈】○遅櫻：開花時期に遅れて咲く桜。「やまつらなりて霞む谷の戸／遅櫻こがくれふかく咲きみだれ」(宝徳四年千句第八百韻・宗砌／竜忠・84／85)。○春はみす：春のうちは見ることなかつた。「御簾」に「見ず」を掛けている。「御簾」は基本的には夏の歌語。○秀句：掛詞を使った句。○なまりて：言葉を別の意味にとらえてずらしかえて。○玉だれの：「玉だれのみすはいかでか」と詠まれた和歌は管見に入らないが、類似の古歌としては、「君によりわが身ぞつらき玉だれの見ずは恋しとおもはましやは」(後撰集・恋一・題知らず・566・詠み人知らず)など。「御簾」を「見ず」と掛ける例歌となる。○山しろの：千五百番歌合で詠まれ、後に新勅撰集に入集した和歌「つづくにのみつとないひそ山しろのとはぬつらさは身にあまるとも」(新勅撰集・恋五・1001・宮内卿)。「山城の鳥羽」の「鳥羽」を「訪はぬ」と掛けるが、判詞は「やましろのとはにあひみんとよめるは、鳥羽ときこえたるに、とはぬつらさはとあるは、すこしかすかにや侍らん」と批判する。

【他出文献】芝草句内発句(吾妻下向発句草) 466

【現代語訳】

遅桜は、春の間、見ることもなかった。ようやく御簾を巻き上げて軒端を眺めた時には遅桜は過ぎてしまっていた。春にはとうとう桜を見なかったと、掛詞を使って述べている秀句である。このように、別の意味にとらえてずらしませすのを、一つの形としているのです。古い歌にも、「玉だれのみすはいかでか」とか、「山しろのとはぬつらさは」などといった類の歌が数知らず（あります）。

【翻刻】

橋にはらひしほと雪もかな

よもきふの宿のたち花にはつもりし雪を

すいしんにはらはせ侍しそかし此比の

花の雪のうすきことを無念といへり

【校異】

橋に―たち花に(文) ほとの一程の(明) よもきふの宿のたち花―蓬生の宿の橋(文)、よもきふの宿の橋

(明) すいしんに―すひしんに(文)、隨身に(明) はらはせ侍し―はらはせ侍しそかし(文)、はらはせしそか

し(明) ことを―事を(文)、事(明) 無念といへり―無念と也(明)

【本文】

42、橋に払ひしほどの雪もがな

蓬生の宿の橋には、つもりし雪を隨身にはらはせ侍りしぞかし。このごろの花の雪の薄きことを無念といへり。

【語釈】○橘に払ひし…『源氏物語』末摘花の巻で、光源氏が末摘花と契った翌朝、末摘花邸を出る際に、深い雪に庭の橘が埋もれているのを随身に払わせた様子。「橘の木も埋もれたる。御隨身召して払はせたまふ」（源氏物語・末摘花）。○蓬生の宿…末摘花の館。「橘のえだうちらはらふ庭の雪に松のみおもぎよもぎふのやど」（巫槐集・雪埋松・786）。○花の雪…まるで雪が降ったかのように、散り敷いた橘の花の花びらが見えるさま。「月影に花たちばなの散みれば消ぬ雪とぞ庭につもれる」（教長集・夜花橘・280）。「木の本のかげふむ月は橘のちりしきけりな句ふ白雪」（草根集・盧橘・980・長祿元年五月廿六日詠）。「君がため花橘を雪とみてすだれをあぐる雲の上人」（松下集・橘・1029）。

【他出文献】竹林抄 1688・芝草内連歌合（天） 2580・芝草内連歌合（松） 45（第三句「かせもかな」）・芝草句内発句（吾妻下向発句草） 558・大発句帳 2700

【現代語訳】

あの源氏物語で、末摘花邸の庭の橘の上の雪を光源氏が払わせたが、その時の庭の深い雪のように、多くの花びらの雪が散り敷いてほしいことだ。

蓬生の宿の橘においては、つもった雪を、随身に払わせたことですよ。その雪の深さを思うと、このごろ咲いた橘の白い花びらが雪のように見えるのが、うつすらとしか散り敷いていないことを、残念だと言うのである。

【引用文献概一覽】

和歌の引用は原則として『新編国歌大観』により、『草根集』は『新編私家集大成』本によった。また、『万葉集』の歌番号は西本願寺本（旧国歌大観番号）により、引用は『新編日本古典文学全集』によっている。

自然齋発句…『宗祇発句集』（岩波書店・昭和二八）

大発句帳…古典俳文学大系 CD-ROM 所収鈴木本

- 宗硯発句並付句抜書：貴重古典籍叢刊11『七賢時代連歌句集』（角川書店・昭和五〇）
- 芝草句内発句：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）
- 新撰菟玖波集：天理図書館善本叢書『新撰菟玖波集実隆本』（天理大学出版部・昭和五〇）
- 雪の煙：貴重古典籍叢刊2『竹林抄古注』（角川書店・昭和四四）
- 連珠合璧集：中世の文学『連歌論集一』（三弥井書店・昭和六〇）
- 竹林抄：新日本古典文学大系『竹林抄』（岩波書店・平成三）
- 光源氏一部連歌寄合：『良基連歌論集三』（古典文庫・昭和三〇）
- 竹林抄之注：貴重古典籍叢刊2『竹林抄古注』（角川書店・昭和四四）
- 竹間：貴重古典籍叢刊2『竹林抄古注』（角川書店・昭和四四）
- 吾妻邊云捨：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）
- 万葉詞：陽明叢書国書編14『中世国語資料』（思文閣出版・昭和五一）
- 万葉集抄：『萬葉学叢刊中世編』（古今書院・昭和四七）
- 龍谷大学善本叢書『類聚古集 影印・翻刻篇上』（思文閣出版・平成一二）
- 宗硯日発句：貴重古典籍叢刊11『七賢時代連歌句集』（角川書店・昭和五〇）
- 古今連談集：『宗硯連歌論集』（古典文庫・昭和二九）
- 源氏一滴集：『未刊国文古註積大系第11冊』（帝国教育会出版部・昭和一一）
- 園塵第四：『早稲田大学蔵資料影印叢書第三十六卷』（早稲田大学出版部・平成五）
- 源概抄：『源概抄 源氏小鏡 寛永古活字本』（勉誠出版・平成二一）
- 源氏物語：『新編日本古典文学全集 源氏物語（一）』（小学館・平成六）
- 長祿三年千句：『大山祇神社法楽連歌』（大山祇神社社務所・昭和六一）
- 秋津洲千句：日文研連歌データベース所収本
- 心玉集・心玉集拾遺（静嘉堂文庫本）：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）
- 菟玖波集：金子金治郎『菟玖波集の研究』（風聞書房・昭和四〇）

壁草（大阪天満宮文庫本）：『壁草（大阪天満宮文庫本）』（古典文庫・昭和五四）

連歌愚句：貴重古典籍叢刊11『七賢時代連歌句集』（角川書店・昭和五〇）

看聞日記紙背連歌：図書寮叢刊『看聞日記紙背文書・別記』（養徳社・昭和四〇）

下草：日文研連歌データベース所収龍谷大学本

匠材集：岡山大学国文学資料叢書『匠材集』（岡山大学池田家文庫等刊行会・昭和五九）

河越千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）

宝徳四年千句：古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）

【参考文献】

岡見正雄「心敬覚書―青と景曲と見ぬ佛―」『室町文学の世界―面白の花の都や―』（岩波書店・平成八）

源氏物語大成（中央公論社・昭和二八〜昭和三二）

寺本直彦『源氏物語受容史論考正編』（風間書房・昭和四五）

湯浅清『心敬の研究』（風間書房・昭和五二）

A Translation and Annotation (3) of
“The 1st Volume of Iwahashi in Shibakusa-ku”
in the Possession of Honno-ji

ITO Nobue and OKUDA Isao

Shibakusa is a collection of wakas and rengas made by Shinkei. He sometimes gave his pupils the collection with notes appended by himself. Iwahashi in Shibakusa-ku, which is one of such annotated books, remains in Honno-ji as two volumes. In view of the importance of the work, Ito and Okuda tried to translate and annotate it. This paper consists of the work on the poems from No. 24 to 42 in the first volume.